

# 私の保育

宗教法人保育園と  
保育者としての私

浪川美知子



キリスト教系の保育園に、働いている者として戸惑っている現状を述べ、幼児教育の場であるからこそ考えられる解決があるのではないか、と思う次第です。

私が働いてまだ一年三カ月のこの保育園は、神父様が理事長で、その奥様が園長先生で、キリスト教精神に基づく保育方針として、三歳児以上は、土曜礼拝の時間が三十分間程設けられています。その形式は、

前奏（入場）

一、朝の挨拶

二、「明るい朝も」幼児賛美歌

三、「わたくしたちは」幼児賛美歌

四、朝の祈り「天のお父様、きれいな朝をお与え下さいましてありがとうございます。きょうも、みんなと仲良く遊べますようにお守り下さい。このお祈りをイエス様のお名前によって、お祈りいたします。アーメン。」

五、お手々の聖書（聖句暗誦）毎月変更

六、理事長先生のお話

七、賛美歌（毎月変更）

後奏（退場）

といったものです。創立して満二年しか経ていない新しい保育園

ですが、この形式は、保育者によって変える事はできないものです。

この様な形式の土曜礼拝を、毎週控えていますので、幼児クラスは、幼児賛美歌を毎日保育内容に入れる事になります。幼児クラス合同で、ホールに集合して礼拝を受けますので、どの子も歌える状態にしておかねばならない、という気持が、保育者の心の内にごく自然に育まれてきます。

とりわけ、ふだんの生活の中に宗教的色彩をもたない家庭の子や、他の宗教を信ずる家庭の子でも、この様な礼拝等の新しい環境に順応してゆく力が相当あるものです。私自身の体験からしてもそれがいえます。

一年間決められた形式で毎日送ってきた子達でするので、私よりも慣れている、といった事もあり、朝の一斉保育の方法に、私自身も神経をとがらせなくなってきました。幼児クラスの平日の朝の流れは、土曜礼拝の六番目以外の内容と大体同じものになります。遠くにお散歩に行く時は、子ども達がほぼ全員登園してくと出かけてしまうので、朝のこうした流れはありません。しかしその他の日は、体操の後は、一定形式の内に一斉保育が始まります。クリスチャンである保育者は、幼児クラスでは、誰もいません。しかし、どの保育者も丁寧に指導していきます。

ところが、P君の行動がいつの頃からか特に目立つ様になってきました。以前から、素直にお手々を組んだり、落ち着いて土曜礼拝や朝の挨拶を受ける子ではありませんでした。保育者が声をかけると、にこっとして静かに戻れる子でした。それがさらに自分のやりたい事をする様になりました。礼拝という性質上、入場から退場まで静かにしていなくてはなりません。この点は園長先生自らが、保育者や子どもに注意されるので、保育者もかなり神経をつかいます。賛美歌を歌う際には起立する約束なのですが、座ったままで平然といたします。膝を抱えて友達とふざけ合ったり、お手々の聖書は開かない、「アーメン。」と言った後、「いただきます。」とふざけたりします。昼食前のお祈りの言葉もありますので、朝の祈りに、「いただきます。」を付け加えますと、とてもおかしいので、他の子ども達も、どっと笑うのです。騒々しくなりすぎますので、保育者もかなりきちんと注意をするのですが、無視しています。

理事長先生のお話は、時には本を持っていらして、イエス様のお話をなさったり、たとえ話をなさって、イエス様の教えを話して下さったりします。こうしたお話を集中して聞く様子がなくなりました。他の子ども達も、どの程度興味を持って参加しているかはわかりませんが、子どもなりの状況判断で静かにしていま

す。こうした類のお話のせいなのでしょうが、お話はともわかり易くして下さるのですが、反応というのが、お部屋に戻りましても返ってきません。人形とか誕生会の催しなどでは、普通の子ども達の様に無邪気な反応をする子達です。礼拝が終わると、ほっとする表情で表へ飛び出してゆく子達です。保育園ですから、午睡、特令時間等も含まれています。幼稚園や家庭児と比すれば、規制の多い生活です。そうした規制に慣れっこになって、その一つだと思っているのかもしれない。

P君一人の反抗ではすまなくなりました。主体的な意志で参加している子ばかりではありません。P君が騒げば一緒になってふざけ出す子もたくさんいます。ましてP君は、我がクラスのリーダー的存在ですので、その投げかける波紋は大きいものです。特に男の子達の礼拝中の態度が乱れてきました。

こういう状態になってきますと、四歳児だけ浮き上った形となります。園長先生自らも、礼拝中一人一人注意されたり、我がクラスは騒々しい落ち着きがない等と言われる様になってきました。保育者としては、一人一人いとおしい存在であるだけにうれしい事でした。

注意するという形では、何の進展も無い状態でした。遊びの中で保育者との関わりが近くなった時に、「どうして、礼拝の時に

お話を聞かないの？」と尋ねました。又か、といった表情でしたが、「だって神様はいないんだよ。お父さんはそう言ったよ。先生はいるっていうけれど、本当はいないんだぜ。」と言いました。私達は（複数担任なのですが）、その様な深い問題とは思いません。今まで、静かにしなさい、立ちなさい、歌いましょう云々と

いった、表面に見える事ばかり注意してきました。P君の反抗的行為は、P君なりの精神内部に生じてきた疑問の結果だったので。表面上取り繕う様な注意で、彼の言動が訂正される筈はありませんでした。私達保育者が、大人の目を気にする以上に、P君に対して、真剣に答えなくてはならないのです。二、三日家へ帰ってもP君の事が頭から離れません。とりあえず父兄との個人面接のチャンスがありましたので家庭での様子をお聞きして、園での様子も話しました。ご両親とも明確な思想を持っていらっしゃる様子です。科学的合理的な精神の持ち主なので、P君に尋ねられれば、過去にあったお話として説明し、ウルトラマンのように想像の世界のもので、神は死んでしまっていないのよ、と正直に話した、という事です。しかし親としては、いろいろな宗教を信ずる方がいてもとやかく言うつもりはないし、書物を見れば、クリスチャンですばらしい方もいらっしやると思うと言います。しかしP君の兄を年長児として預けている一年の間に、何か園長先

生との間でトラブルがあり、不信感を抱いている事もわかりました。キリスト教精神と、現実の人間存在としての園長先生にギャップを感じた様です。それ以前は、預ける場としてこの保育園しかないので、神の問題にしても協力してゆく、というか目をつむっていこうとしていたのですが、こうしたギャップを感じた後は、親は親の考えを子どもへ伝えてゆこうと思ったらしいのです。P君は、両親をとっても尊敬している男の子です。保育園での生活時間が長いとはいえ、五歳になったP君の精神世界を支えるのは家庭での影響が大了。話し合ってみると、大人の問題が微妙に絡まってきて、複雑な問題をさらに抱えてしまいました。

親が信頼感を失った経過の問題に関しては、私達はどうする事もできませんが、集団生活である以上、時には秩序を守らなければならぬ旨お話ししました。集団的に問いかけられた話を聞かないという事に関しては、P君に厳しく注意して下さいと母親は言っていました。しかし、P君の場合厳しくしつづけるといった問題ですむのだろうか、と疑問に思います。私達保育園の側に問題はないのか―私達保育者はクリスチャンではありませんし、キリスト教を保育の中で、何とか教化しようなどという意志はありません、礼拝とか形式的宗教色というのは園の方針なのです―等とすました顔はしていられないのか、と思ったのです。私

達は幼児教育の現場にいる以上、良心を持ち、一人一人が納得できる姿でしか、子どもの前に立って保育できません。

この保育園の場合、市役所の方で公募した子どもを全員引き受けています。園独自の採用はありません。第一志望で来た子どももいますが、人数調整上回されてきた子どももいます。それに加えて、この地域三カ所の保育園とも、似た様なキリスト教系保育園です。

特令保育は、公立はやらずに民間の一部のみですので、通勤時間のかかる方、常勤していらっしやる方は、好むと好まざるに関わらず、この保育園を選択せざるを得ません。幼稚園とは、そうした点で随分状況が違ってきます。P君の目立つ行為があつて、はじめてこうした事情が保育者の意識にはっきりとのぼってくるというのも、我々の安易さに恥ずかしい思いがします。保育園を創立なさる方が、広い意味でのキリスト教精神といったもので保育していかうという場合には、P君の問題は、別次元での解決ができるでしょう。しかし、食事、おやつ、礼拝、誕生会とはほぼ全ての行事の流れに、形式的に明確な姿で、宗教的色彩が濃い保育園では、P君が時には保育室に隠れたり、押し入れに入っていたりして反発してみる気持が理解できます。日常生活とあまりに関連がなく、P君は戸惑いつつもおもしろくないのでしょう。欧米世界では、教育の場であれ、家庭であれ、ある程度統一した宗教観

がありますので、この様なギャップは感ぜずにすむでしょう。ところが日本では、無宗教的基盤が大半で、その上に神仏共に存在し、新興宗教を信する人も、もちろんあります。幼児期において、広い意味での宗教体験とか、その精神世界を知るのには、それなりに意味があるのではないかと思います。現代では、自然的な世界と離れた都会で毎日を送り、自然への漠とした畏怖や、地方独特の祭祀も、幼児期に体験せずに過してくる子も多い世の中です。私達を支え精神的規範も千差万別となっております。父親としての権威や存在感も少々薄れ、子ども達や私達を見つめる精神世界の統治者はいないといった状態です。

だからこそ、どこか成長の過程で意識的に接触させてみたいと思うのかもしれないと。

二歳児クラスの子どもの例ですが、仏壇の前にしても、祭祀で神社へ行った時も、「天のお父様だね。」と、ごく自然に、大人に促されもせずに手を合わせています。その様なとらえ方で良いと思うのです。私達は、親としても、地域に生きる者としても、伝えあってゆくものを失ないつつあるようです。私が幼児期の頃でさえ、祖母の家へ行けば、川で食器を洗い、井戸水を飲料水としていました。その土地で生きる者は、川で汚ない物は流しませんでした。下流では食器を洗い、顔を洗い、田で働く者は、川で手

を洗い食事する生活を自分の体験として知っているからです。子ども達にも、そうした感受性は伝達されていた事でしょう。しかし、現代では、あっという間に、道徳とかいった知識として教えこまなければわからない時代になってしまいました。汚染されてゆく川の流れ一つにも、私達の先祖の養ってきた自然性が失なわれつつあります。

しかし、意識的に機会を与えなくては、とは思いますが、はみ出す子を目立たせる様な、形式的画一化された宗教体験は、本来に保育園に必要なのか疑問です。子どもを管理している、といった要素が強いように感じられてなりません。受動的な活動でしかなかったし、子どもの感覚を重んじ、子どもの発見とか、成長を待たず、大人がせっかちに押しつけた形式でしかなかったようです。子ども達の前に立ち、大人の事情で、小さな権力者となつて、皆に同じ事をさせよう、などと思わない事です。まず保育室に戻つて、子どもとの毎日の関わりにおいて、今までの規制を取り外し、朝の流れが忍耐力を養う時間帯になっていない様に、保育者間で厳しく検討し合わなくてはなりません。我がクラスの子どもの状態で生きる保育方法を見つけてゆく課題と、園全体で、もう一度形式化した方法や他の問題について考えてもらう課題と残されています。

子どもの内面的世界を豊かにする教材に、絵本や紙芝居、映像といったものがあります。こうした分野にも、宗教色といった要素が入り込んできます。絵本もほとんど無く、雑誌位しかない保育室に、聖書の絵本版は何冊もきちんとある、とか、イエス様に関するフィルムしか無い、という状況は、当然の事ながら片手落ちです。保育者が図書館や自分の物を持ち寄り、子ども達に与える方法も可能ですが、子ども達は、興味を覚えれば、自分の手で目で、じかに触れたいのが絵本です。保育室の手の届くところに、すてきなお話や絵本は欲しいものです。たまたま巡り合った保育園で、何年間かの幼児期を過ごす子達なのです。どの子にも、豊かな体験をさせてあげたい、楽しい不思議なお話に触れさせたい、絵本の世界に遊ばせたい、と思うのは私だけではない事でしょう。たくさんある絵本の中に、あつイエス様のお話もあるよ、という感じで置いてあるなら問題はないでしょう。キリスト教文化に根ざした質の高い絵本や物語も数多くあります。

しかしそうした物ばかりでなく、キリスト教系の幼児教育用に安易につくられた、聖書の絵本版とか紙芝居などもあります。質の高くないものには、保育者は厳しく選択してゆかねばならないし、文化的教材に関しては、実践している者の希望を十分に考慮し、自由に話し合い予算を組んでゆくべきではないかと思いま

す。当然その様な事を押し進めている園も多いのでしようが、歴史も浅い私の所では、まだ自由に提言しきれない段階にあります。民間の場合、特性を出せる良き、と共に枠組も強く、一人一人の保育者の力はある面もあります。しかし未来を子ども達と創ってゆく者として、豊かな体験の中から、自己表現をどの子もおさえる事なく、一人一人思いきり成長してゆける場としての保育園づくりをするのは、そこに働く保育者の良心に基づく義務のようなものです。

園長先生と保育者、保育者どうし、保育者と子ども、園側と父兄、といった関係が、縦にではなく横に回転する様な、人間関係の方法は、どうしてゆくことで見出せるのか、本音を出し合える場は、どうしてつくってゆけるか、手探り状態ですが探求しようと思えます。

(東京・みぎわ保育園)

